

二本松市文化財調査報告書 第21集

二本松城址 V
—平成13年度発掘調査報告書—

平成14年3月

二本松市教育委員会

二本松市文化財調査報告書 第21集

二本松城址 V

—平成13年度発掘調査報告書—

平成14年3月

二本松市教育委員会



二本松城址第6次調査区（ミニゴルフ場北）全景【調査前】(南より)



二本松城址第6次調査区（ミニゴルフ場北）全景【調査後】(南より)



1 9区精査状況（西より）
[P49・50検出状況]



2 P49柱材検出状況
（北より）



3 P49柱材検出状況
（北より）

1 P 49礎石検出状況
(北より)



2 P 49柱材取上げ後
精査状況 (北より)



3 P 49柱材取上げ後
精査状況 (北より)





1 7a区石垣精査状況 (西より)



2 7a区石垣精査状況 (北西より)



1 7a-b区入角部石垣精査状況（西より）



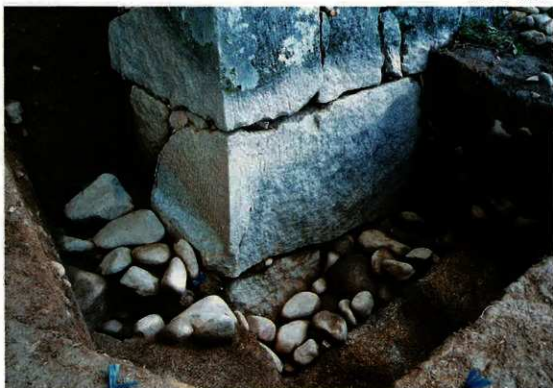
2 7b区石垣精査状況（南西より）



1 6 a 区根石検出状況 (北より)



2 6 b 区根石検出状況 (北より)



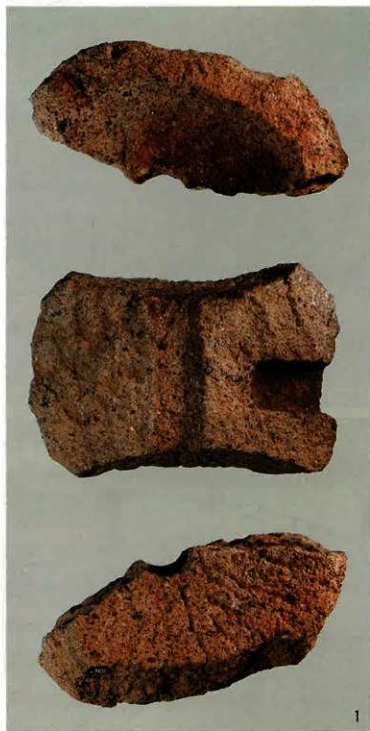
1 6 c区根石検出状況 (北西より)



6 d区根石検出
状況 (西より)



6 d区精査状況
(南より)



石臼（7 a-b区）



灯明皿（6 a区1層）



おろし皿（4区2-2層）

序 言

二本松城は、室町時代中期に畠山氏によって築城されて以来、戦国時代に一時伊達氏の支配下となり、次に会津領支城として蒲生氏、上杉氏、再蒲生氏、加藤氏と城主・城代が変遷した後、寛永20(1643)年8月二本松藩誕生に伴って丹羽氏が城主として入府し、さらに戊辰戦後の廃藩置県まで、実に約430年にわたり城郭として機能を維持した有数の名城であります。

そして、歴代の城主・城代たちが意のままに修改築、増築などの城郭整備を手がけたことは、現存する古文書・絵図面等の史料や古記録が物語っております。しかし、その整備の姿が誰にでも確認できるものは極一部で、空堀や土塁、石垣など地表上で見えるものに限られ、大部分は地下に埋もれた状態で今日にいたっている状であります。

その埋もれた遺構や遺物を、発掘調査によって慎重かつ丹念に掘り起こすとともに、史料・古記録との比較検討を重ねて得た史実をもとに、今後の城址保存及び整備に活用することが、現在年次計画で進めております二本松城址総合調査事業の基本的な考え方であります。

本書は、第6次発掘調査の結果をまとめたものですが、最も古い時期に位置付けされると思われる門跡や搦手門に接続する全長55メートルにも及ぶ石垣の発見があり、今後の事業推進に大きな役割を果たすものと確信しております。

最後になりましたが、調査に際して多くのご指導、ご教示をいただきました鈴木啓先生、並びに福島県教育庁文化課、さらに快く作業に従事されました市民の方々に、心から厚く感謝を申し上げます。

平成14年3月

二本松市教育委員会教育長 渡 邊 専 一

例 言

1. 本書は、平成13年度国庫補助事業として二本松市教育委員会が実施した二本松城址総合調査事業における発掘調査の結果をまとめたものである。
2. 出土遺物の整理は洗浄・注記を桑原尚子、門馬久子(二本松市教育委員会文化課臨時職員)が実施し、分類・復元については桑原の協力を得た。
3. 遺物の実測は門馬が、トレースは中村が担当した。また遺構、遺物の挿図・版組は中村が担当し、その修正は桑原、門馬の協力を得た。
4. 遺構および遺物の写真は中村が担当した。
5. 遺構の全体平面写真測量および石垣立面測量は㈱シン技術コンサルに委託した。
6. 本報告書の執筆は中村が担当した。
7. 本調査で出土した遺物および写真・図面等資料は二本松市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 測量における基準設定は㈱シン技術コンサルに依頼し、遺構実測図中の方位は座標軸を示す。
2. 遺構実測図のうち断面図に示した数字は海拔高度を示し、平面図のアルファベットは対応する断面図の位置を表している。
3. 特徴的な遺構および特徴的な遺物を出土した遺構に限って記述した。
4. 遺物は石臼は1/3、他は1/2で収録した。遺構については図ごとに縮尺を示した。
5. 遺構断面図の土の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖(1990年版)』によった。
6. 陶器類において釉の範囲を一点鎖線で示した。
7. 遺物実測図における遺物の寸法において、単位はcm、()のあるものは残存長を示す。
8. 本文中で使用した略号は次のとおりである。

S K…土壌 S D…溝跡 P…柱穴

目 次

原色図版	第3章 調査結果	11
序文	第1節 遺構と遺物	11
例言・凡例	(1) 1～4区および搦手門台東石垣前地区	11
第1章 過去の調査	(2) 5区	15
第2章 調査経過	(3) 搦手門台西石垣(6区)	15
第1節 調査要項	(4) 東斜面石垣(7区)	18
第2節 調査に至る経過	(5) 8区	19
第3節 調査日誌	(6) 跡(9区)	19
第4節 調査方法と概要	第2節 まとめ	26

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	第9図 石垣立面図(1)	17
第2図 過去の調査区域及び第6次調査範囲	第10図 石垣立面図(2)	21
第3図 遺構配置図	第11図 石垣立面図(3)	23
第4図 4区・7c区・8区断面図	第12図 7b区立面図	24
第5図 6a区および6b区実測図	第13図 9区実測図	25
第6図 6c区実測図	第14図 出土遺物 陶磁器・瓦	28
第7図 6d区実測図	第15図 出土遺物 石製品	29
第8図 検出石垣位置図	第16図 出土遺物 金銀製品	30

図 版 目 次

原色図版1 本松城址第6次調査区(ミニゴルフ場南)全景	図版10 出土遺物(1区)
原色図版2 9区精査状況・P49柱材検出状況	図版11 出土遺物(2・3区)
原色図版3 P49礎石検出状況・P49柱材取上げ後精査状況	図版12 出土遺物(8・9区)
原色図版4 7a区石垣精査状況	図版13 出土遺物(4区)
原色図版5 7a-b区入角部石垣精査状況・7b区石垣精査状況	図版14 出土遺物(6・7区)
原色図版6 6a区根石検出状況・6b区根石検出状況	図版15 出土遺物 石製品
原色図版7 6c区根石検出状況・6d区根石検出状況・6d区精査状況	図版16 出土遺物 鉄製品
原色図版8 出土遺物(石臼・灯明皿・おろし皿)	図版17 出土遺物 銅製品・古銭・墓石
図版1 4区精査状況	
図版2 7b区精査状況	
図版3 搦手門台東石垣北面崩落状況	
図版4 搦手門台東石垣前地区精査状況	
図版5 平瓦(1区)	
図版6 かわけ(7区)	
図版7 塀(4区)	
図版8 塀(7区)	
図版9 三脚土器(7区)	



第1図 遺跡位置図

第1章 過去の調査

当城址に関する調査は、本格的な調査としては平成3・4年度に実施された本丸部平面調査(第1次)、平成5～7年度に実施された本丸石垣修築復元に伴う調査(第2次)に続き、平成10・11年度には二本松城址総合調査事業として新城館に比定される平場の調査(第3・4次)を、平成12年度は本丸西側の帯郭の調査(第5次)を実施している。以下にその概略をまとめる。(第2図)

【第1次調査】期間：平成3年3月6日～同年8月21日(延97日間) 面積：約3,000㎡

霞ヶ城公園整備計画に伴い、本丸跡の天文台および休憩所・便所等の既存建造物が撤去されたため、本丸跡平場をA・B・C地区、その周辺部をD地区、さらに本丸直下大石垣と前平場をE地区と便宜上呼称し、調査を実施した。なお当調査が二本松城址における初の本格的な発掘調査であった。

〈発見遺構〉A～C地区：掘立柱建物跡8棟・掘立柱塀跡3列・礎石建物跡1基・井戸跡1基・溝状遺構1条・土塼3基・性格不明石列1条

D地区：虎口右側隅角部から大守台東側入角部に至る全長約56mの石垣。

E地区：現存大石垣の右側に連続する高さ約4m・長さ約8mの石垣、および大石垣前面平場から柱穴とピット約200穴・土塼1基。

〈出土遺物〉A～C地区：小刀(小柄)・こうがい・吸口・古銭[至道元寶][熙寧元寶][元豊通寶][政和元寶][洪武通寶][永樂通寶][寛永通寶]

D地区：落款・石臼・石皿(ヒデバチ)

E地区：油皿・鉢・雁首・古銭[熙寧元寶]

〈まとめ〉A～C地区検出の建物跡は、配置関係や切り合いなどから5期にわたる時期区分が想定された。特にSB01は庇付きの身舎と考えられ、伊達成実による整備期に相当する主屋で、その東西に各々付属建物を配している。D地区の検出石垣は、最も残りの良い部分で9石であったが、始築時に相当する慶長期の穴太積みによる古式石垣をはじめ、その後改築された元和期・寛永期・江戸後半期と、各時期の石積み様式が確認でき、本丸石垣の変遷を紐解く上で大きな成果であった。なお、詳細については、『二本松城址Ⅰ』(平成2・3年度調査報告書 平成4年3月)を参照されたい。

【第2次調査】期間：平成5年8月13日～同7年6月30日 面積：約2,200㎡

第1次調査の成果を受けて本丸石垣を修築・復元するため、3年11月に二本松城址石垣復元委員会を組織し、文化財としての本格的な整備を図るべく検討作業に入った。その結果、第1次調査前の既存石垣の大部分は昭和期の修復であることが判明したため、基本方針として本丸全体を対象に“二本松城址が城郭として機能していた時代＝安土桃山～江戸時代の技法のなかで、修築・復元を進めることが望ましい”との結論付けがなされた。

これを受けて、二本松城址本丸石垣修築復元事業に着手した。そして、工事と調査が大

規模、かつ慎重さを要する学術調査を目的とすることから、教育委員会と市長部局の専任職員からなるプロジェクトチームを組織し、約2年の歳月と総工費約5億3千万円を費やして実施した。

〈基本方針〉1. 時代性＝安土桃山・江戸時代に機能した二本松城の、各時期の石積み様式を活かしたこと。

2. 伝統技術＝先人が残した知恵と技術をくみとり、石の石配方法や加工方法にそれぞれの時代を反映した技術を採用したこと。

3. 地域性＝二本松城の構築技術を調査・検討し、ノリ・ソリなど二本松城ならではの特徴を活かしたこと。

4. 強度＝裏込め石の選択や、軟弱な支持基盤の補強、雨水処理など、できうる限りの耐久性を考慮したこと。

〈まとめ〉二本松市独自に作成した作業工程要領＝マニュアルに基づく検討を経て、全国でも初めての例とされる本丸石垣全体を対象とした当事業は、所期目的を概ね達成できたといえる。また、工事と並行して随時慎重な調査を実施したことで、現存石垣の内部から旧石垣の一部が検出され、古記録・絵図との比較検証から、蒲生氏による慶長初期の本丸石垣を、寛永初期に加藤氏が拡張して現況の縄張りに至ったことが判明したことは、大きな調査成果であった。なお、詳細については、『二本松城址Ⅱ』(二本松城址本丸石垣修築・復元事業報告書 平成9年3月)を参照されたい。

【第3次調査】期間：平成10年6月8日～同年7月24日(延32日間) 面積：約500㎡

【第4次調査】期間：平成11年6月7日～同年8月21日(延46日間) 面積：約600㎡

平成6年度に「二本松城学術検討委員会」を組織し、主に遺跡としての側面から城址の保存管理について調査・検討を行い、9年度に二本松城址保存管理計画を策定した(『二本松城址保存管理計画報告書』平成10年3月)。その中で、今後の保存管理および活用をする上で城址全体の現状把握と遺構確認等が最優先とされた。この提言を受け、9年度に城址全体の現況平面測量図を作成、10年度から「二本松城址総合調査事業」と称し、長期計画により資料収集を目的とした遺構確認調査を実施することとなった。調査地区は、中世から戦国期の新城館および再藩生期・城代時代の西城比定地である通称“少年隊の丘”を対象とし、土捨て場・平場面積等の関係から第3次・第4次の2ヶ年にわたって調査を実施した。なお平成11年度の第4次調査から文化庁所管国庫補助対象事業となった。

〈発見遺構〉掘立柱建物跡3棟・掘立柱柵列跡6条・溝跡2条・土壇1基・焼土遺構6基・石敷遺構6基・石組遺構2基

〈出土遺物〉陶磁器片(相馬・志野織部・肥前等)・鉄製品(釘・ヒウチガネ・クサビ・弾丸・小札・鉄甲等)・銅製品(雁首等)・漆木製品・古銭・葺石

〈まとめ〉中世から戦国期に相当する遺構・遺物はほとんど確認されず、掘立柱建物跡のうち2棟は出土遺物から18世紀後半期に位置付けされた。しかし、絵図等

史料から当地区に新城館及び西城が置かれたことはほぼ間違いない考察であることから、中世から近世後半期まで普遍的に建物等諸施設の建て替えが行われたためと判断された。また、焼土遺構のうち直径4m・深さ2mほどの大穴からは、人為的に廃棄された大量の焼土と炭化材が出土した。畠山・伊達両氏の二本松城攻防戦の末、畠山氏が自焼し開城、入城した伊達成実がその跡を清掃したとする諸記録がある。それらによると、自焼した場所を攻城・本丸・本城・城中などと記している。第1次調査では自焼の痕跡とみられる遺構はまったく確認されていないことから、上記の焼土遺構が自焼、そして清掃の痕跡である可能性が極めて高いと考察された。したがって、当該地区は少なくとも天正期において、本丸・本城的機能を十分有していたと判断された。なお、詳細については『二本松城址Ⅲ』(平成10・11年度発掘調査報告書 平成12年3月)を参照されたい。

【第5次調査】期間：平成12年9月14日～同年11月15日(延43日間) 面積：約825㎡

本丸西側、一段下の南北に長い平場、通称“ミニゴルフ場”の北側半分を対象とし、畠山期の侍屋敷跡の検出が予想されることから、中世の城内での生活の様子を明らかにすることを目的とした。

〈発見遺構〉掘立柱建物跡2棟・溝跡4条・土塋7基・石敷遺構1基・石列遺構2条・井戸跡2基

〈出土遺物〉陶磁器片(岸等)・軒丸瓦・鉄製品(釘・クサビ等)・銅製品(銅碗・雁首等)・碁石

〈まとめ〉当平場は昭和期の公園整備の際にカクランを受けており、本来の平場の幅が現況の半分以下であること、その平坦面も急峻な地形を盛土して確保していることが明らかとなった。また盛土しながら積んだ自然石による石組の井戸が発見され、これが慶長年間の遺構であることから、当平場を成形した時期も同時期とみられる。さらに、北部に検出された土塋から、当平場北部が畠山期の“権現丸”として機能した可能性が指摘された。したがって畠山期と慶長期と、少なくとも2時期の改変・利用が判明し、近年までの慶長期の様相を維持していたことが推察された。なお、詳細については『二本松城址Ⅳ』(平成12年度発掘調査報告書 平成13年3月)を参照されたい。



第2図 過去の調査区域及び第6次調査範囲

第2章 調査経過

第1節 調査要項

遺跡名称	二本松城址(遺跡地名表登録番号 21000019)
所在地	福島県二本松市郭内四丁目228-1
遺跡現況	公園
調査面積	約970㎡(遺跡全体面積72,000㎡)
遺跡性格	城館
遺跡時期	中世～近世
調査目的	保存管理計画に基づく資料収集のための発掘調査
調査期間	第6次：平成13年(2001年)9月4日～同年11月9日(延べ39日間)
土地所有者	二本松市(市長 根本尚美)
調査主体	福島県二本松市教育委員会 教育長 渡邊卓
調査担当	中村真由美(二本松市教育委員会文化課副主査・日本考古学協会会員)
調査補助員	桑原尚子 門馬久子
調査指導	鈴木 啓(二本松市文化財保護審議会委員)
作業員	安斎丑一 石川公夫 遠藤嘉一 尾形啓充 国分正三 齋藤武雄 佐藤四郎 菅野勝与 鈴木重治 田中 繁 土屋 博 橋本陽子 松本長吉 宮島三郎 門馬和也 安田ミヨ子 柳田ユキ子 吉田清治 渡辺金造 渡辺千代 渡辺松夫 渡辺三男(以上、地元有志)

第2節 調査に至る経過

当城址は都市公園として利用されていることから、“遺跡の保存”と、“公園としての活用”という2つの面を推進していく必要がある。市教育委員会は活用するためには城址の現状把握、すなわち遺構の残存する場所と規模、性格等を把握することが不可欠であるとして、「二本松城址総合調査事業」と称し、長期計画により資料収集を目的とした発掘調査を実施することとした。平成9年度には城址の平面測量が実施され、正確な地形の把握がなされた。平成10・11年度は東・西城の二城代時代に西城が置かれていた「新城館」と比定される平場である少年隊の丘を調査対象とした。12年度は本丸西側、一段下の平場であるミニゴルフ場北側を調査対象とした。今年度は同じ平場の南側半分および勝手門付近を調査対象とした。畠山期には正門であったといわれており、その時期の様相や門に関連した遺構の検出が予想される。

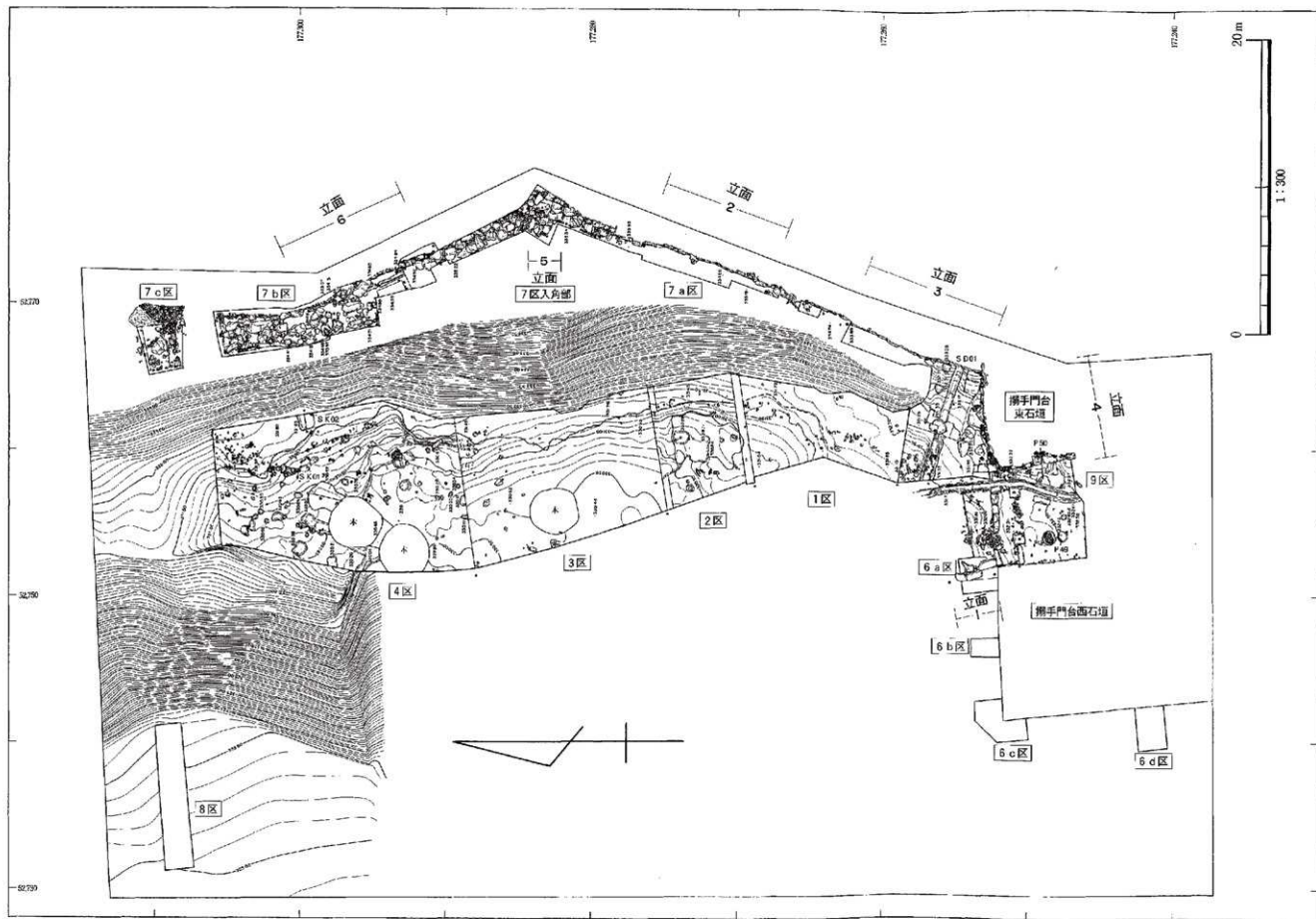
第3節 調査日誌

- 9月4～5日 機材搬入。重機による表土および盛土層の除去開始。
9月6日 起工式。平場南側より荒掘り開始。

- 9月7、10、12日 調査区を設定し(1～4区)、荒掘りおよび精査。1・2区間にサブトレンチを入れ、層位を確認。サブトレンチのセクション実測。
- 9月13～14、17～19日 4区の荒掘り。2・3区の精査。グライ層の堆積範囲の確認。掘手門台東石垣北面の精査。東斜面石垣の根石部の検出。
- 9月20～21日 1区サブトレの掘り込み。2・4区はグライ層を除去。5区の精査・実測。
- 9月25日 鈴木啓先生来跡指導。掘手門部分の精査。5区土翠断面実測。
- 9月26～28日、10月2～4、9、11～12日 1区精査、平面図実測。4区のグライ層の除去・精査。6a～6c区設定、精査、実測。7区東斜面石垣の延長確認。8区トレンチ設定、掘削。
- 10月4日 7区で入角部検出。
- 10月9日 1区の北壁セクション実測。4区SK01・SK02精査、半裁、実測。
- 10月11～12日 1区SD01・P1・P2精査、実測。4区北壁セクション実測。9区設定、精査。
- 10月15～19、22～24日 1区P1精査、実測。6b～6d区掘削、精査、実測。7区石垣前面の掘削。8区掘削、精査、実測。9区精査、実測。7・9区のピットの半裁、実測。
- 10月23日 鈴木啓先生来跡指導。東斜面石垣および掘手門の様式について検討。
- 10月25～27、29～30日 全体清掃、遺構表示。写真測量。
- 10月27日 現地説明会。63人参加。
- 10月29日 7区の埋め戻し開始。9区P49より木柱検出。
- 10月30日 鈴木啓先生来跡指導。P49の検討、P50の検出。6・7区の埋め戻し。
- 10月31日 P49実測。6・7区埋め戻し。
- 11月1日 県文化課・大平好一氏、小林雄一氏来跡指導。東斜面石垣埋め戻し終了。機材撤収。
- 11月9日 福島県立博物館・松山隆嗣氏来跡指導。P49出土木柱とりあげ。
- 11月28～30日、12月3～5日、21～22、25～29日 重機による埋め戻し。

第4節 調査方法と概要(第3・4図)

当平場は本丸の位置する三角錐状の独立丘陵の西辺にあたり、本丸より一段低く、その比高差は約28mを測り、東西ともに急峻な崖面となる。東西幅約12～20m、南北約130mの細長い帯郭で全体的に平坦であるが、東から西へ緩やかに傾斜している。東から延びる緩やかな尾根により、中央で南北2つの地区に区分された状態であることから、平成12年度は北地区を中心に発掘調査を実施し、平成13年度は東斜面を含めた南地区およびそれに連続する掘手門地区の調査を実施した。



門跡1基、溝跡2条、土壇2基、ピット48基、東斜面中腹に石垣が54.8m検出された。

これらの遺構はほとんどが東斜面中腹の石垣前面(7b区)および搦手門台東石垣前の1区より検出されている。また、前年度の調査結果同様、ほぼ中央から西半部は地山が急激に落ちていく様子が観察でき、昭和40年代の公園整備の際に西側に盛土がなされたことが再度確認された。なお、2～4区の旧生活面はグライ化しており、生活には不適切な地区であったことがうかがえる。

基本層序は1～4、8区では6層でL1：工事盛上層、L2：グライ層(旧表土面)、L3：茶褐色土層(整地盛土層)、L4：炭化物を含む整地層(2区のみ)、L5：火砕流土層、L6：地山(花崗岩風化層)の順に堆積する。L2、3層が旧生活面であり、L6は東側で露出し、削平され平坦面を削りだした様子がうかがえる。6区ではL1：盛土及び堆積土層、L2：旧表土面、L3：整地層と堆積し、9区ではL1：現表土(碎石)層、L2：整地(旧表土)層、L3：地山(花崗岩風化層)の堆積がみられた。

調査は任意に調査区を設定し実施した。南北に長い平場は、南北に1つに区分し南より1～4区と設定した。5区では搦手門台東石垣上部の上段部分の断面調査を実施した。6区は搦手門台西石垣の根石部分の調査であり、北東角部(6a)、北面中央部(6b)、北西角部(6c)、西面中央部(6d)の4ヶ所設定した。7区では東斜面中腹の石垣の延長を確認し、入角部で南北に分け、南側が7a、北側が7b、北端の石垣が検出されなかった地区を7cとした。さらに当平場の下段の平場で、最も幅の広い地点にトレンチを1本設定し、8区とした。また搦手門の礎石のある部分を9区とし、9グリットにわけて調査を実施した。

第3章 調査結果

第1節 遺構と遺物

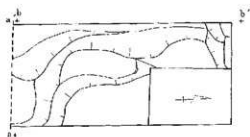
今回の調査において、遺構はほとんど検出されていない。したがって、地区ごとに調査成果を概観し、その中で各遺構について詳述していくこととする。

(1) 1～4区および搦手門台東石垣前地区

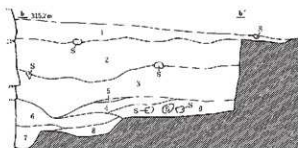
1～4区は平成12年度に実施した通称・ミニゴルフ場の南側半分にあたり、今年度の調査範囲内では平坦面にあたるため、搦手門に関係する諸施設の検出が目的とされた。調査の結果、旧地形は東側から約1～2m幅で平坦面を形成するが、すぐに傾斜を急にして西へ向けて傾斜することが判明した。また、3区にむけて傾斜する様相を呈し、1区の最南端ではやや広い平坦面を形成する。この部分を搦手門台東石垣前地区と呼称した。これら平坦面は既に地山が露出し、表土は5～10cmと浅いが、2～4区においては西へ向かうにつれ昭和40年代の公園整備工事による盛土が最大約60cm堆積している。旧地形における表土はそのまま埋められたことが明らかで、グライ化しているため草本類およびヒノキの切り株が腐朽せずに残存していた。これら旧表土(L2)を除去すると火砕流礫の混じる茶褐色土層(L3)が検出される。地山はより急に傾斜していくため、L2およびL3層が整地層であり、地山をやや削平して平坦面を造りだし、さらに盛土・整地して生活面を確保していたことが明らかとなった。この結果は平成12年度に実施した、北側半分の調査結果と同様である。なお、地山による平坦面にはキャタピラ痕がみられるため、公園整備の際にも地山が削平されている可能性が高い。

遺構は4区から土壌2基(SK01、SK02)が検出されている。SK01は傾斜したL3上面で検出されているが、不整形であり、堆積土もグライ層のみであるためカクランである可能性が高い。出土遺物は陶器碗片1点(図版13-1)、磁器片1点、釘1点(第17図3、図版16-3)が検出されている。SK02は東側平坦面で検出されているが内面の凹凸が激しく、カクランである可能性が高い。出土遺物は本郷産の陶器甕片1点が検出されている。

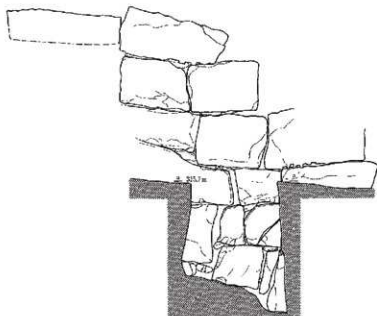
搦手門台東石垣前地区では、地山が露出し、平坦面を広くもつが、後述する東斜面に延びる石垣はこの平坦面の東側の約1m高い部分に位置し、急激に傾斜して平坦面に連するため、地山を削平して平坦面を確保していることがわかる。ここでは溝跡1条(SD01)、ピットが6基検出されている。SD01は東斜面石垣に直交して貫まれ、確認長で8.3m、上幅46cm、下幅26cm、深さ約78cm～45cmを測り、東から西へ傾斜する。断面形は箱型を呈し、西へ延びて西端は調査区外で不明である。西へ向かうにつれ、砂質土層から掘り込まれるため、溝の形状はやや不明瞭となる。石垣際では石面に沿って下へ掘り込まれ、深さは約75cmを測る。石垣の根石前面には、石垣と平行して細い溝が刻まれSD01につながる。したがって、石垣前面の排水路的な役割を早したものと考えられる。出土遺物は、上層から瓦片2点(図版10a・b)、土器片3点、釉が流し掛けされた陶器口縁部片1点(図版10f)、すり鉢片1点(図版10g)、釘2点(第16図1・2、図版16a・b)が検出されて



〔6 a 区〕

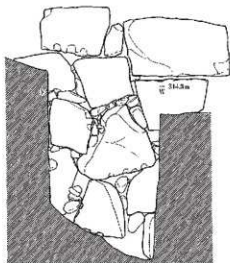


〔6 a 区西壁セクション〕

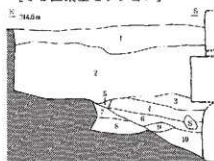


- 〔5 a 区西壁セクション〕
1. 10V R/L 1 最も多い層、砂質あり、中硬な岩、地山砂が混入、その厚さ約、2m
 2. 10V R/L 2 最も多い層、砂質あり、地山砂が混入、ランセ多、含む、次第に硬くなる、最も多い
 3. 10V R/L 3 最も多い層、砂質あり、地山砂が混入、ランセ多、含む、次第に硬くなる、最も多い
 4. 10V R/L 4 最も多い層、砂質あり、地山砂が混入、ランセ多、含む、次第に硬くなる、最も多い
 5. 10V R/L 5 最も多い層、砂質あり、地山砂が混入、ランセ多、含む、次第に硬くなる、最も多い
 6. 10V R/L 6 最も多い層、砂質あり、地山砂が混入、ランセ多、含む、次第に硬くなる、最も多い
 7. 10V R/L 7 最も多い層、砂質あり、地山砂が混入、ランセ多、含む、次第に硬くなる、最も多い
 8. 10V R/L 8 最も多い層、砂質あり、地山砂が混入、ランセ多、含む、次第に硬くなる、最も多い
 9. 10V R/L 9 最も多い層、砂質あり、地山砂が混入、ランセ多、含む、次第に硬くなる、最も多い
 10. 10V R/L 10 最も多い層、砂質あり、地山砂が混入、ランセ多、含む、次第に硬くなる、最も多い

〔6 b 区〕



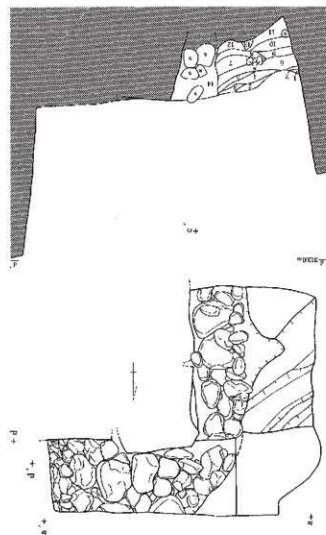
〔6 b 区東壁セクション〕



- 〔6 b 区東壁セクション〕
1. 10V R/L 1 最も多い層、砂質あり、中硬な岩、地山砂が混入、その厚さ約、2m
 2. 10V R/L 2 最も多い層、砂質あり、地山砂が混入、ランセ多、含む、次第に硬くなる、最も多い
 3. 10V R/L 3 最も多い層、砂質あり、地山砂が混入、ランセ多、含む、次第に硬くなる、最も多い
 4. 10V R/L 4 最も多い層、砂質あり、地山砂が混入、ランセ多、含む、次第に硬くなる、最も多い
 5. 10V R/L 5 最も多い層、砂質あり、地山砂が混入、ランセ多、含む、次第に硬くなる、最も多い
 6. 10V R/L 6 最も多い層、砂質あり、地山砂が混入、ランセ多、含む、次第に硬くなる、最も多い
 7. 10V R/L 7 最も多い層、砂質あり、地山砂が混入、ランセ多、含む、次第に硬くなる、最も多い
 8. 10V R/L 8 最も多い層、砂質あり、地山砂が混入、ランセ多、含む、次第に硬くなる、最も多い
 9. 10V R/L 9 最も多い層、砂質あり、地山砂が混入、ランセ多、含む、次第に硬くなる、最も多い
 10. 10V R/L 10 最も多い層、砂質あり、地山砂が混入、ランセ多、含む、次第に硬くなる、最も多い



第5図 6 a 区および6 b 区実測図



第6図 6c区実測図⁴⁾

【オセランシオン】

1. 10Y R1/1 緑色の強い、粗粒な、カンザシ。
2. 10Y R1/1 緑色の強い、粗粒な、カンザシ。
3. 10Y R1/1 緑色の強い、粗粒な、カンザシ。
4. 10Y R1/1 緑色の強い、粗粒な、カンザシ。
5. 10Y R1/1 緑色の強い、粗粒な、カンザシ。
6. 10Y R1/1 緑色の強い、粗粒な、カンザシ。
7. 10Y R1/1 緑色の強い、粗粒な、カンザシ。
8. 10Y R1/1 緑色の強い、粗粒な、カンザシ。
9. 10Y R1/1 緑色の強い、粗粒な、カンザシ。
10. 10Y R1/1 緑色の強い、粗粒な、カンザシ。
11. 10Y R1/1 緑色の強い、粗粒な、カンザシ。
12. 10Y R1/1 緑色の強い、粗粒な、カンザシ。
13. 10Y R1/1 緑色の強い、粗粒な、カンザシ。
14. 10Y R1/1 緑色の強い、粗粒な、カンザシ。

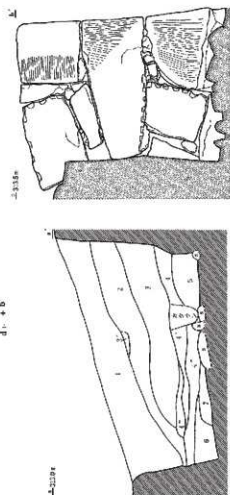
【オセランシオン】

1. 10Y R1/1 緑色の強い、粗粒な、カンザシ。
2. 10Y R1/1 緑色の強い、粗粒な、カンザシ。
3. 10Y R1/1 緑色の強い、粗粒な、カンザシ。
4. 10Y R1/1 緑色の強い、粗粒な、カンザシ。
5. 10Y R1/1 緑色の強い、粗粒な、カンザシ。
6. 10Y R1/1 緑色の強い、粗粒な、カンザシ。
7. 10Y R1/1 緑色の強い、粗粒な、カンザシ。
8. 10Y R1/1 緑色の強い、粗粒な、カンザシ。
9. 10Y R1/1 緑色の強い、粗粒な、カンザシ。
10. 10Y R1/1 緑色の強い、粗粒な、カンザシ。
11. 10Y R1/1 緑色の強い、粗粒な、カンザシ。
12. 10Y R1/1 緑色の強い、粗粒な、カンザシ。
13. 10Y R1/1 緑色の強い、粗粒な、カンザシ。
14. 10Y R1/1 緑色の強い、粗粒な、カンザシ。

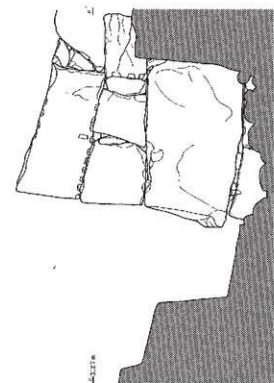
△-3138*

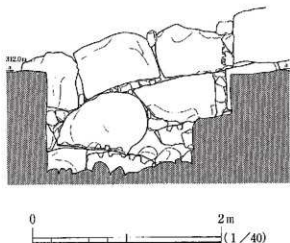
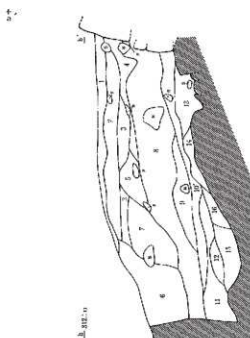
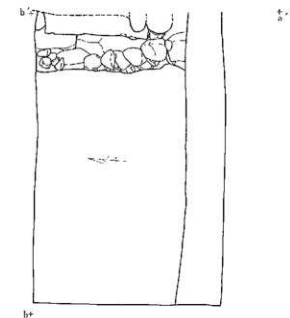
d' + b'

△-3139*



0 2m (1/40)





- 【6d区画】
1. 10Y R 5/5 磁器片あり、瓦器片あり、ワットあり、破石
 2. 10Y R 5/5 磁器片あり、瓦器片あり、破石あり、瓦器片あり、ワットあり、破石
 3. 2.5Y 5/5 磁器片あり、瓦器片あり、破石あり、瓦器片あり、ワットあり、破石
 4. 10Y R 5/5 磁器片あり、瓦器片あり、破石あり、瓦器片あり、ワットあり、破石
 5. 10Y R 5/5 磁器片あり、瓦器片あり、破石あり、瓦器片あり、ワットあり、破石
 6. 10Y R 5/5 磁器片あり、瓦器片あり、破石あり、瓦器片あり、ワットあり、破石
 7. 10Y R 5/5 磁器片あり、瓦器片あり、破石あり、瓦器片あり、ワットあり、破石
 8. 10Y R 5/5 磁器片あり、瓦器片あり、破石あり、瓦器片あり、ワットあり、破石
 9. 10Y R 5/5 磁器片あり、瓦器片あり、破石あり、瓦器片あり、ワットあり、破石
 10. 10Y R 5/5 磁器片あり、瓦器片あり、破石あり、瓦器片あり、ワットあり、破石
 11. 10Y R 5/5 磁器片あり、瓦器片あり、破石あり、瓦器片あり、ワットあり、破石
 12. 2.5Y 5/5 磁器片あり、瓦器片あり、破石あり、瓦器片あり、ワットあり、破石
 13. 10Y R 5/5 磁器片あり、瓦器片あり、破石あり、瓦器片あり、ワットあり、破石
 14. 10Y R 5/5 磁器片あり、瓦器片あり、破石あり、瓦器片あり、ワットあり、破石
 15. 2.5Y 5/5 磁器片あり、瓦器片あり、破石あり、瓦器片あり、ワットあり、破石
 16. 10Y R 5/5 磁器片あり、瓦器片あり、破石あり、瓦器片あり、ワットあり、破石

第7図 6d区実測図

いる。ピットは配置に規格性がないため、建造物等ではなく石垣を積む際の足場用のピットである可能性が考えられる。遺物はP1上層より直径3cmの球形の礫1点(図版10b)が検出されている。花崗岩製である。

その他遺物は、1区からは崩落土および表土より平瓦21点(第14図1、図版5、図版10n)、丸瓦5点(図版10i)、砥石(第15図1、図版15b)1点、陶器片1点(図版10e)、土器片1点、半壊した陶器鈴1点(図版10m)、L2から平瓦3点(図版10k)、内外面に緑色釉のみられる陶器片1点(図版10j)、L3から土器片1点、陶器片1点(図版10c)、染付けのみられる磁器片4点(図版10d・e)、L3より小片かつ磨減した土器片3点、L5より磁器片1点のほか空き缶が検出されている。したがって、この地区では地山付近までカクランを受けていることが明らかである。

2区ではL1より土器片3点(図版11a)、染付けのある小皿(磁器)片1点(図版11b)、不明銅製品(第16図20、図版17a)1点が出土し、L2より土器片4点、内1点は大型の甕の1口から肩にかけての部分(図版11c)である。磁器が2点、その内、中国産とみられる

染付が1点(図版11d)、内外面乳白色の釉が施された陶器片1点が検出されている。ガラス片が伴う。L2-2からは土器片2点、陶器片1点、フレーク1点が検出されている。以上のことから、L2は江戸期の整地面であるが、近・現代まで同じ形状で利用されていたことが判明した。L4から土器3点、フレーク1点、焼土塊1点(図版11e・f)が検出された。焼土塊は直径7cm、内径5cmで筒状を呈し火を受けていることが明らかであることから、フイゴの口であるとみられる。L5からは土器片3点、L7から磁器片1点、土器片4点が検出されている。

3区からはL1より現代瓦(図版11g)1点、L2より陶磁器片3点、現代瓦1点、土器片1点、L2-1からは青磁の高台部分(図版11h)、ガラス片、現代瓦片が出土している。

4区からはL1より現代瓦(図版13c)、不明石製品1点(図版13b)が、L2からは磁器6点のほか現代瓦、ガラス片など近・現代に属するものが多い。L2-2からは陶器片4点、磁器片21点が検出され、おろし皿1点(原色図版8-3、第14図2)、乳白色の釉がみられ貫入のあるもの(図版13k)、唐津産の皿(図版13g)がみられる。磁器片は染付が大部分であるが(図版13l)、小碗の底部片(図版13f)や淡緑色の釉があるもの2点がみられる。L2-3層からは土器片3点、陶器片3点、磁器片6点が検出された。陶器片の内1点は小型の碗の口縁部～胴部(第14図3、図版7)である。また、陶器片には唐津産の皿(図版13m)が含まれる。L3からは陶器片4点、内1点は本郷産の甕(図版13n)、磁器片4点、土器片6点が出土している。また元祐通宝1点(第16図19、図版17e)がみられる。その他近・現代に属する瓦・ガラス等が検出されている。

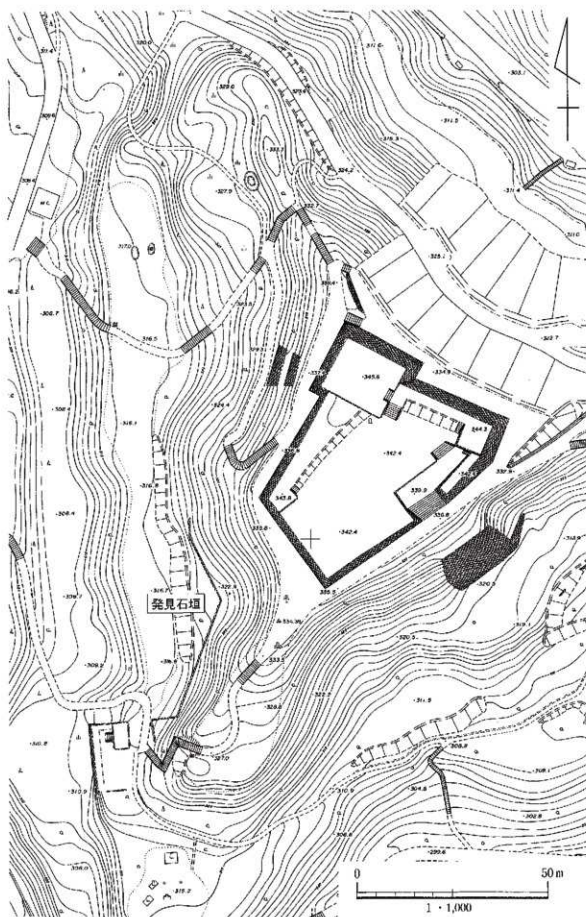
以上のことから、当該区域はかなりカクランを受けていることがわかり、本来は切岸により成形された細い帯郭であったことが判明した。

(2) 5区

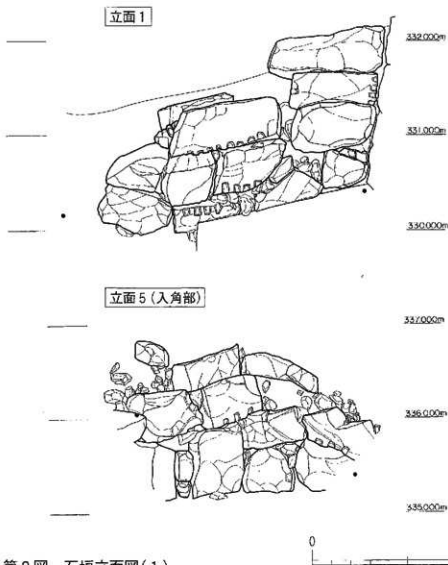
搦手門台東石垣上の土塁状を呈する部分の断面を調査した。その結果、火砕流土層を成形して土塁状を呈していることが明らかとなった。盛土はほとんどみられず、火砕流土を切り出すことのみで成形している。したがって、この上部平場が、土塁により防備されていたこととなり、平地面についても今後調査を実施する必要がある。

(3) 搦手門台西石垣(6区)

この石垣は天端まで現存するが、コンクリートを用いていることや、隅角部に江戸切りが施されていること、角石のスタレが横に配されていることなどから積み直していることが明らかであったため、石垣の始築時の形態と時期を明らかにするため、4箇所について根石部分を確認した。北面の東部を6a、北面中央を6b、北西隅角部を6c、西面中央を6dとして調査を実施した。その結果、いずれも地表面下に2～3段の石垣が存在し、始築時のまま残存していることが明らかとなった。6c区や6d区では近・現代の堆積土が約50cmみられることから、本来の整地面はより低く、石垣がより高く見えるように整地されていたものと思われる。6a区や6b区からは傾斜する地山を切って石を水平に据えていることが観察された。また、6c、6d区では、地山を掘り込んで根石を据え、その



第8図 検出石垣位置図



第9図 石垣立面図(1)

前面に裏込め石に用いるような玉石を捨石として置いている様子がみられた。捨石用の溝幅は約60cmで、深さは根石1石分を測るようである。6 a、6 b区ではみられない技法であるため、重量のかかる西側や隅角部にこのような工法を用いたものと思われる。なお、地表面下は積み直されていないことから、石垣のプランはほぼ現況どおりであることが確認された。

遺物は6 a区石垣裏より灯明皿1点(第14図4、原色図版8-2)、I.1より土器片1点(図版14 a)、平瓦1点、L 6より平瓦1点(図版14 b)が出土している。6 c区L 1からは陶器片1点(図版14 c)、I.2より唐津産の内面のみに釉がみられる高台部1点(図版14 d)、L 3からは黒色の釉が厚く施された陶器の高台部片1点(図版14 e)、釘1点(第16図4、図版16 d)が検出されている。6 d区ではL 2より外面に乳白色の釉がみられる陶器片1点(図版14 f)、釘1点(第16図5、図版16 e)、L 3より釘3点、L 6より乳白色の釉がみられる陶器片1点(図版14 g)が出土している。

以上のことから、これらの石垣の始築年代は、地表面化の石垣様式が寛永様式であることから、寛永期、加藤氏の時代に築かれたもの判断された。

(4) 東斜面石垣(7区)

搦手門台東石垣北東隅から、平場を囲む東斜面中腹へ延びる石垣で、全長約54.8m確認された。北端は火砕流の地山が露出している部分(7c区)までであり、途中地形に合わせて入角部(7a-b区)をつくる。入角部より南側を7a区、北側を7b区とした。南端の搦手門台東石垣との入角部は石材を組んでおらず、両者の構築に時間差があったことを示す。大半は崩落土により原位置を保っていないが、残りのよいところで高さは1~2m、石材は4段ほど検出されているが、根石まで確認していない部分もあるため、石垣の段数についてはさらに増える可能性もある。布積み崩しであることがわかり、その様式から寛永期の所産であるとみられる。

石垣は急峻な斜面中腹のテラス状の部分に沿って南から北へ向けてのぼるように築かれており、南端では約1mであった平場との比高差は、北部では最大約3.5mを測る。北端の7c区では、前述したように火砕流の地山が露出し、これに突き当たる形で石垣が止まっている。テラス部分は削平により人工的に作り出されたものであり、7c区では、地盤が強固であるために石垣を築く必要がない状況であったと考えられる。

また、7b区最北端の石垣は根石まで確認されており、地山を削平して幅約2mのテラスを確保して石垣を築いていることが判明した。この平場の幅は他の地点に比較して広く、この地区に42基のピットが検出されている。配置に規格性がみられず、代表的な数基のみ半歳して調査した結果、欄列などの構造物ではないと判断された。出土遺物はなく時期等是不明だが、おそらく石垣構築の際の足場等であると思われる。

遺物は7a区より磁器片2点が検出され、いずれも内外面とも染付けがみられるI緑部片である。他に素焼きの土器片10点があり、いずれも小片であるが内1点はすり鉢の口縁部片(図版14h)、もう1点はかわらけの底部片(図版14i)であることがわかる。石製品は使用痕のみられる砥石1点(第15図3、図版15a)、石臼片1点(図版14j)、碁石状石製品1点、石英質のフレーク1点、拳大の礫3点が検出された。図示できなかったが釘片が2点と現代の瓦片やガラス片も検出された。

7a-b区からは素焼きの土器片11点が検出され、坏片が多く(図版14n)、内1点を図示した(第14図7、図版6a)。また、三脚の火鉢の底部片(図版14k)がみられた。陶器片は3点、内1点は内外面ともに淡緑色の釉が施され貫入がみられる小片である(図版14m)。また、図版14lは8区出土の陶器と接合したことから、本丸西側斜面が大規模に崩落した時期があることがうかがえる。他に上臼片1点(第15図4、原色図版8-1)、平瓦1点、碁石1点(図版17g)、古銭1点(図版17f)、拳大の礫5点、用途不明の鉄塊が検出されている。

7b区では陶器片2点(図版14p・q)、かわかけ片1点(第14図5、図版6b)、近代の磁器の碗1点(図版14o)、砥石1点(第15図2、図版15c)が表採され、特に現代瓦が多数表採されることが特筆される。崩落土内からは暗緑色の釉が内外面に施された陶器片2点、碗の破片1点(第14図8、図版15d)が検出されている。根石前面からは素焼きの土器の小

片7点(図版14s)、磁器片2点(図版14r)、三脚の上器の底部片(第14図9、図版9)などが検出されている。これは底径18.9cmを測り、直径6cmの高台状の脚を有し、内外面とも黒色である。明治以降の所産と判断された。

これら出土遺物のほとんどが、石垣とともに崩落した崩落土およびその後の崩落土内に混在した状態で出土しており、石垣の年代を決定付けるものではない。

以上のことから、石垣の年代を出土遺物から特定することはできないが、前述したように石垣の様式からは寛永期、すなわち加藤氏時代に石垣を構築したものと思われる。さらに、このような急峻な斜面は、南北朝期の切岸によるものと判断され、切岸を形成した際に生じた小規模のテラスを加藤氏時代に利用して石垣を築いたものと解釈された。

(5) 8区

ミニゴルフ場の一段下の平場に設定したトレンチである。ミニゴルフ場との比高差は約8.4mある。ミニゴルフ場がかなりのカクランを受け、現地形が変化しているため、この平場についても同様の状況がみられるか否かを確認することを目的とし、最も幅が広い部分に2×10mのトレンチを東西に長く設定した。

調査の結果、トレンチ東側では約20cmほどで地山が検出されるが、トレンチ東端から4mの地点から地山が急激に傾斜し、トレンチ西端では2m掘削しても地山は検出されていない。東端では約20cm、西端では約80cmの盛土がみられることから、当平場においてもミニゴルフ場(平成12・13年度調査地)同様、公園整備の際に東側を削平して、西側へ盛土したことが明らかとなった。したがって、旧地形は幅4m以下の南北に細長い帯郭であったものと推察される。なお、東側の平坦面には遺構は検出されなかった。8区を設定した地点は、当平場において最も幅の広い地点であり、この区域で遺構が存在しないことは、当平場を生活空間として利用していた可能性が低いことを示唆しよう。

遺物は1.2から陶器片2点が出土し、内1点は外面に緑色の釉がみられる甕片(図版12a)で、須恵器のような印象を受ける。もう1点は7a-b区出土資料と接合した(図版14e)。他に素焼きの上器片3点(図版12b)、磁器片1点がみられる。このように遺物は少なく、検出された遺物も崩落によるものとみられることから、当平場が生活空間ではなかったことが裏付けられよう。

(6) 門跡(9区)

現存する搦手門部分を9区とし、碁盤の目のように東西に3つ、南北に3つと9つのグリット(以下、G)に分け、中央北から1、2、3G、西側北から4、5、6G、東側北から7、8、9Gとして調査を実施した。その結果、2時期の門跡が確認された。掘立柱による門の時期を第1期、礎石をもつ門跡の時期を第2期とし、それぞれ詳述する。

〔第1期〕 現存する西側礎石の南方、約80cmの地点に検出されたP49は、直径約90cm楕円形を呈し、深さ約1.3m測る。これから東方へ約3.6m(2間)を測って同様の形状のピット(P50)が検出されている。整地層(L2)をはがした段階で確認されたことから現存の門跡より古いことが明らかである。掘立柱の門跡と判断され、現存礎石と主軸の方向をほぼ

揃える。P50はコンクリート製の側溝が上面北東側を横切るため検出のみとした。P49は調査の結果、底面に柱材が残存しており、板状の花崗岩や板材で周囲を補強している状況が観察できた。柱材は根元部約20～30cmの長さが残存しており、直径は約30cm、手斧による6～8面の面取りをしたような調整痕が確認できる。分析を実施していないが、樹種はクリ材である可能性が高い(福島県立博物館 松山隆嗣氏のご教示による)。また、柱材は礎石の役割をした扁平な花崗岩に据えられていたものとみられ、柱材はこの礎石の中心から西へずり落ちた形で検出された。礎石は径約25～30cm、厚さ約13cmを測る円形の石で柱穴の中央部をやや掘りくぼめて据えられている。柱穴の断面形は箱型を呈し、検出面では楕円形を呈するとみられた平面形も底部にいくにしたがって円形を2つ繋げた8の字状を呈している。これは礎石が中央にあることから2つのピットの切り合いではないことは明らかで、柱穴内での作業のためにこのような形状を呈したものと思われる。門の形態は冠木門と推定される。

出土遺物は土器の小片が1点(図版12c)検出されたのみであり、この遺物から時期等を判断することは難しい。しかし、礎石立ちの門跡よりさかのぼることは明らかで、後述するが、礎石立ちの搦手門を整備したのは加藤氏と考えられることから、第1期の時期は畠山氏、あるいは初期藩生氏と推定される。いずれにしても現段階で当城址における最古期の遺構であり、絵図面等の史料で検証を進めていきたい。出土した柱材については樹種・樹齢などできる限りの分析を行うとともに、保存処理を施したうえで、展示公開する予定である。

【第2期】 現存する2個の礎石は原位置を保っていることが確認された。いずれの礎石も平面形はほぼ正方形で、規模は60×64cm、高さは整地面上までで18cmを測りさらに整地面下へ延びる。石の上面から下へ向けてすその広がる形状を呈しきれいに成形されているが、整地面下は石表面の仕上げを省いている状況が観察できた。掘り方はなく、石を据えてから整地して仕上げていることがわかった。上面の中央に1辺13cm、深さ3.5cmの正方形のホゾ穴があり、門柱自体は1辺30cmほどと想像される。またそれぞれの礎石上面の内側隅角に直径9cmの円形の穴が確認され、扉が存在したことがわかる。柱間は3.2m、扉部分は2.8mを測る。また、それぞれの礎石から東西の門台石垣への距離は約1.4mを測り、1枚の扉幅と同じであることから、計画的に門と台石垣を配置していることがうかがえる。このことから礎石立ちの門と台石垣は同時期の所産と判断されよう。

出土遺物は2GL2より不明石製品(図版12d)、3GL1より赤焼きの瓦(図版12e)、3GL2からは丸瓦1点(図版12f)、5GL1より陶器の小片2点、8GL2からは「銘酒東山」とかかれた磁器の盃(図版12g)が検出されている。9Gでは磁器片2点(図版12h・i)が表採され、L2からは土器の小片が1点、階段石の据え方内から不明石製品1点(図版12j)が検出されている。金属製品は他の調査地に比較して出土量が多く、1GL2からは釘3点(第16図6・7・9、図版16f・g・i)、リング状の不明鉄製品1点(第16図8、図版16h)、吸口が1点(第16図18、図版17b・b')、4GL1から釘片5点(第

337.000m

立面2 (7 a区)

336.000m

335.000m

334.000m

336.000m

立面3

335.000m

334.000m

333.000m

337.000m

立面6 (7 b区)

336.000m

335.000m

0 2 m
(1/40)

第10図 石垣立面图(2)

337,000m

338,000m

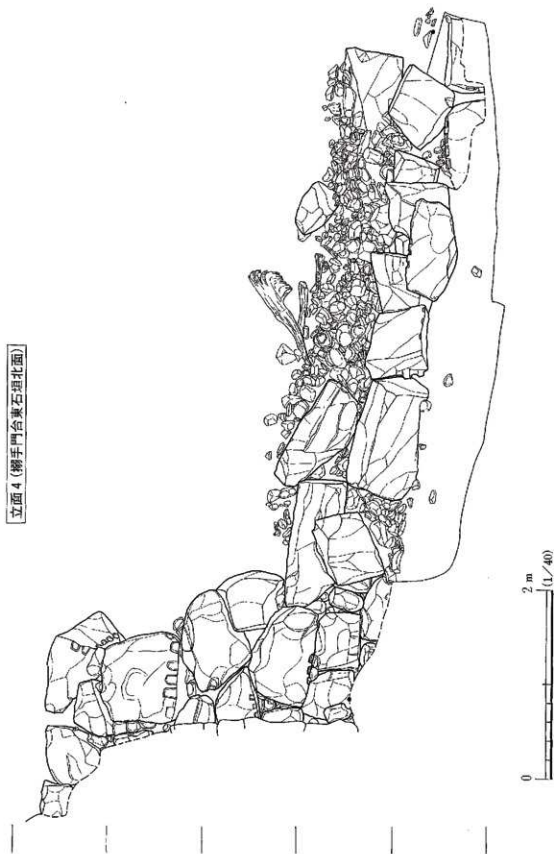
339,000m

340,000m

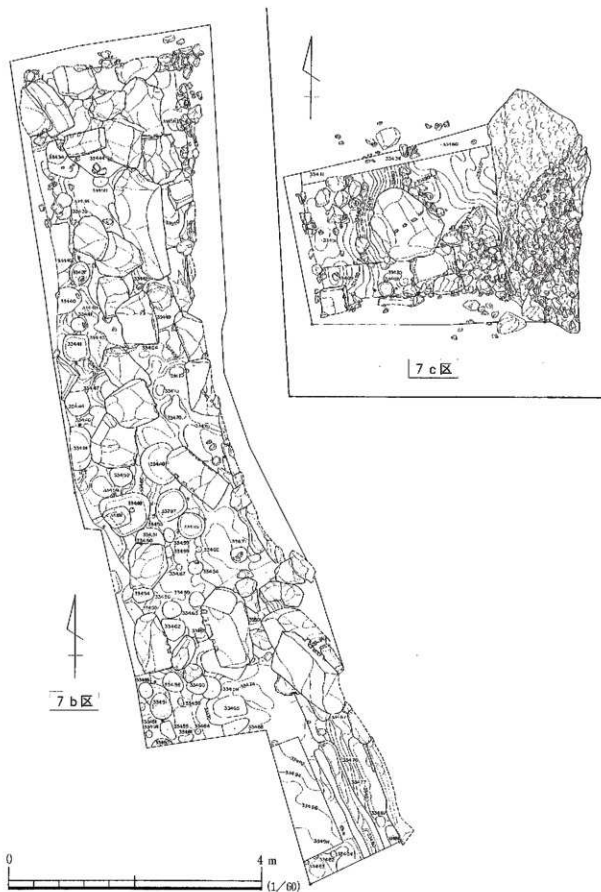
341,000m

342,000m

立面 4 (柳手門台東石垣北面)



第11図 石垣立面図(3)



第12図 7 b 区立面図

16図11、図版16k)、L2から釘1点(第16図10、図版16j)、5GL1から釘の小片2点、7GL1から釘片3点、一銭硬貨1点(図版17d)、7GL1下より釘7点(第16図15・16、図版16o・p)、7GI.2より釘3点(第16図12~14、図版16l~n)、寛永通宝1点(図版17c)、P50を検出した9区東拡張部より釘1点(第16図17、図版16q)が検出されている。吸口は内部に筒状の木製品が残存していた。釘が多く出土していることは、門の存在を裏付けるが、現代のものも混じっており明確ではない。このようにこれらの遺物は現代のものが混在しており、礎石を据えた整地面(L2)は近年まで表土であったと推測される。

第2節 まとめ

今回の調査においては、本来の平場は現況よりかなり狭いことが判明し、道路的な帯郭であったことが明らかとなった。また、平坦面が確保できる掘手門台東石垣前地区においては、昭和40年代の公園整備の際に削平されているため、建造物等は確認できなかった。

また、掘手門では現存する礎石立ちの門跡以前の門跡を確認することができた。柱穴が確認され、現存の門より南に位置するが主軸を同じくし、ほぼ同位置であることが明らかとなった。遺物が検出されなかったため明確な年代は不明であるが、おそらく畠山氏あるいは初期蒲生氏の時代の遺構と考えられ、現在発見されている遺構としては最古であり、貴重である。さらにP49からは柱根が検出され、やはり中世の遺物として希少である。これについては平成14年度に保存処理を施す予定となった。この第1期の門跡は冠木門であると考えられ、礎石立ちの第2期の門跡は石垣等周囲の構造から、高麗門であった可能性が考えられる。したがって、当該地区が中世から近世まで城址の門として重要な役割を担ってきた地区であることが明らかとなった。

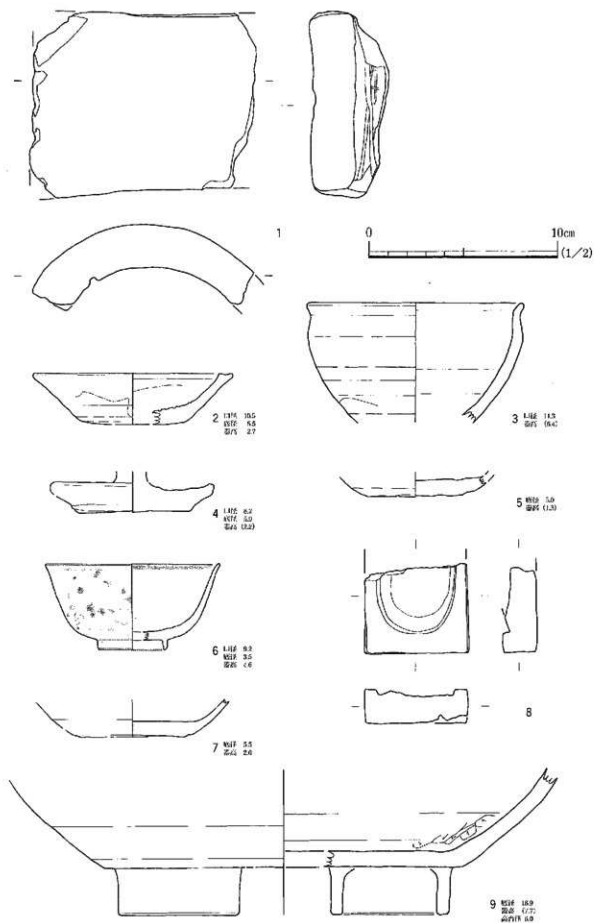
東斜面の石垣の存在は、斜面の中腹という特異な場所であり、これまであまり注意を払っていない場所のため、城内に同様の石垣が埋もれている可能性を示唆するものである。それゆえ、今後の調査を進めるうえで十分に注意すべきことと認識された。これらの石垣は、その石の形状、積み方から、寛永様式とみられ、寛永4年に入府した加藤氏によるものと思われる。こうした中腹に築かれた石垣は、おそらく南北朝期に切岸を形成した際に生じた小規模のテラスを、加藤氏を利用して石垣を築いたものと解釈できる。したがって、前年度に調査した際に、当平場が2時期の改変が行われた可能性が指摘されたが、今回の調査成果を踏まえると、1期目の権現丸がおかれたと考えられる時期は畠山氏による切岸による整地の時期であり、2期目の盛土・整地によるやや平坦面を拡張した時期は、加藤氏による石垣築造の時期にそれぞれ対応させることができそうである。

また、掘手門台東石垣は地表より上部は既に積み直されているが、幸いにも地下部分は手を加えておらず、地山を階段状に削平して寛永様式で積まれたことが判明し、加藤氏によるものと判断された。掘手門の石垣と、東斜面の石垣では若干時期差がみとめられ、東斜面のほうが新しい。前述した礎石立ちの高麗門は掘手門台東石垣が構築された時期と同時期と考えられることから、第2期の門は寛永期の年代が与えられよう。

以上のことから、今回の調査によって、二本松城の搦手門付近は加藤氏の時期に石垣により整備されたことが明らかとなった。

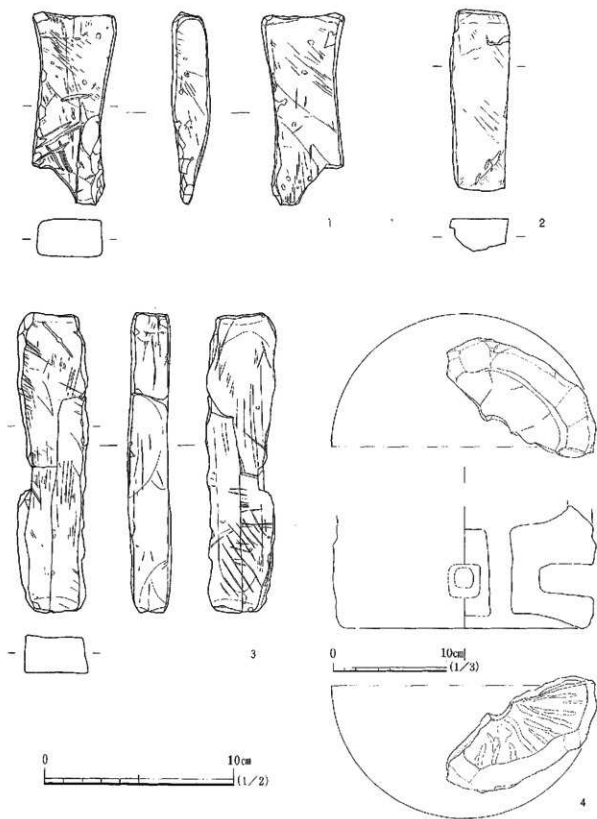
《参考文献》

- 1992 『二本松城址Ⅰ』二本松市教育委員会
- 1997 『二本松城址Ⅱ』二本松市教育委員会
- 2000 『二本松城址Ⅲ』二本松市教育委員会
- 2001 『二本松城址Ⅳ』二本松市教育委員会



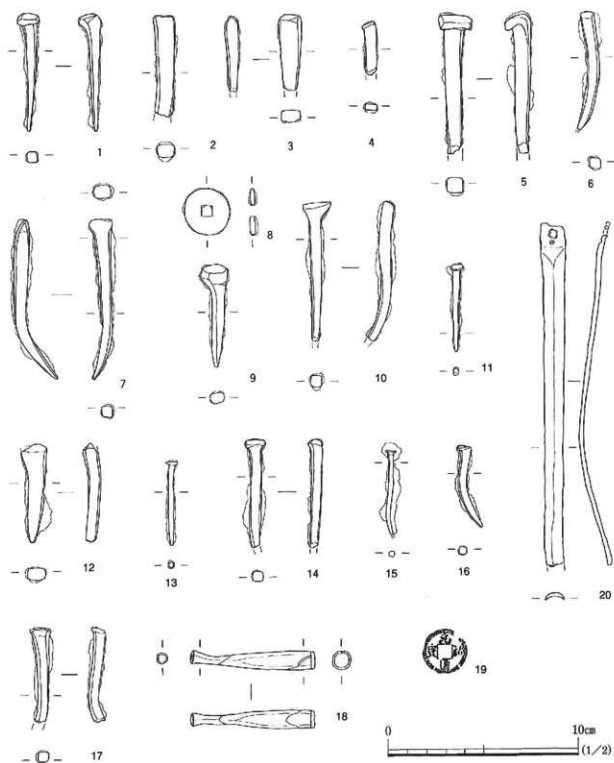
第14図 出土遺物 陶磁器・瓦

1-1区L6(平瓦)、2-4区L2-2(おろし皿)、3-4区L2-3(碗)、4-6a区L1(灯明皿)、
5-7b区表採(かわらけ)、6-7区表採(碗)、7-7a-b区(かわらけ)、8-7b区(碗)、
9-7b区(三脚土器)



第15図 出土遺物 石製品

1-1 区表採(廊石)、2-7 b 区(砥石)、3-7 a 区(砥石)、4-7 a-b 区(石臼)
※石臼は1/3、他は1/2の縮尺である。

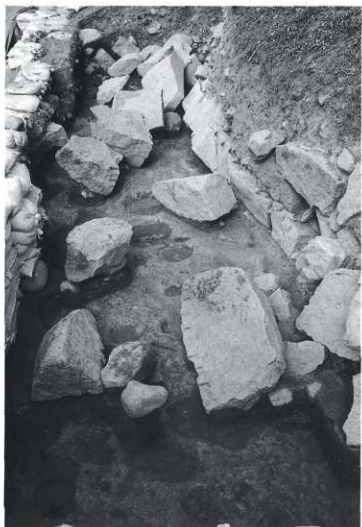


第16図 出土遺物 金属製品

1・2-1区SD01、3-4区SK01、4-6区L3、5-6区L2、6-9-9区1GL2、
10-9区4GL2、11-9区4GL1、12-14-9区7GL2、15・16-9区7GL1F、17-9区東拉張、
18-9区7GL2、19-4区L2、20-2区L1



図版 1 4区精査状況 (東より)



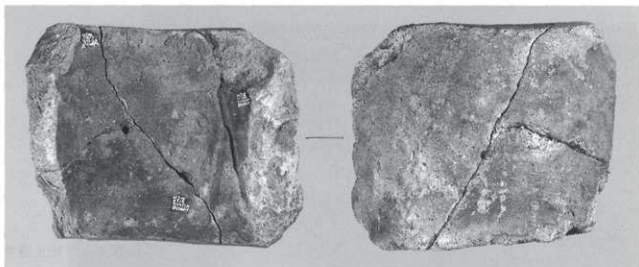
図版 2 7b区精査状況
(南より)



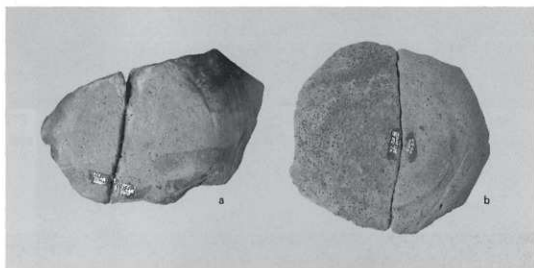
図版 3 搦手門台東石垣北面崩落状況（北より）



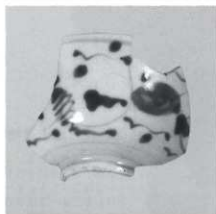
図版 4 搦手門台東石垣前地区精査状況（北西より）



図版5 平瓦(1区)



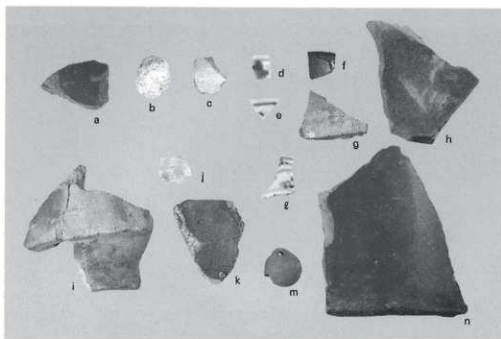
図版6 かわらけ(7区)



図版9 三脚土器(7区)

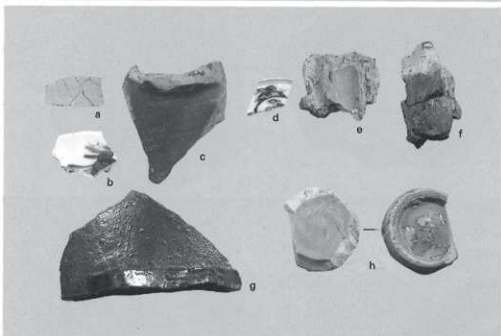
(上)図版7 碗(4区)

(下)図版8 碗(7区)



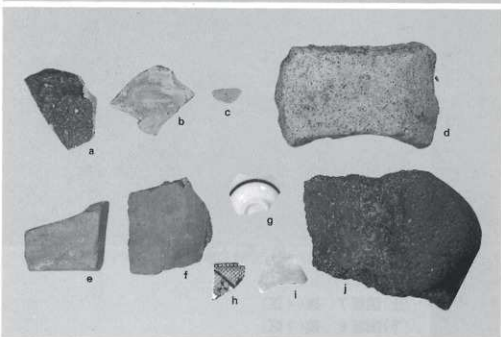
図版10 出土遺物(1区)

[a・f～h-SD01上層、b-
P1上層、c～e-サブ
レ③L2、i-L1、j・k
-L2、l-入角表土、m・
n-崩落土内]



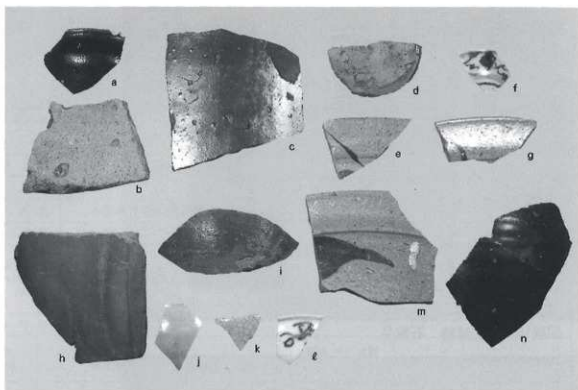
図版11 出土遺物(2・3区)

[a・b-2区L1、c・d-
2区L2、e・f-2区L4、
g-3区L1、h-3区L2]



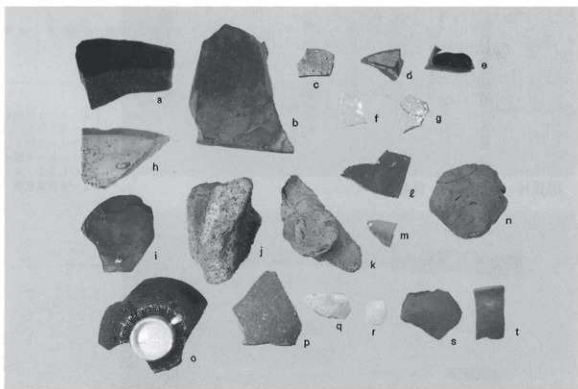
図版12 出土遺物(8・9区)

[a・b-8区L2、c-9区
P49、d-9区2GL2、e
-9区3GL1、f-9区3
GL2、g-9区8GL2、
h・i-9区表探、j-9G
スエカタ内]



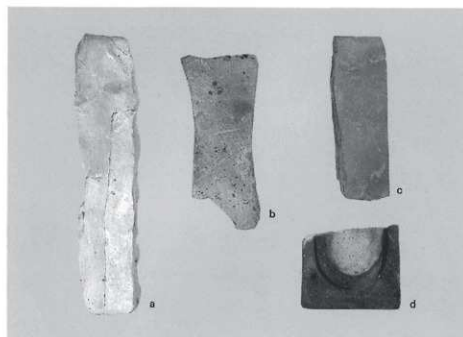
図版13 出土遺物(4区)

(a-SK01、b・e-L1、d-L2-1、e-L2カクラン、f-ℓ-L2-2、m-L2-3、n-L3)



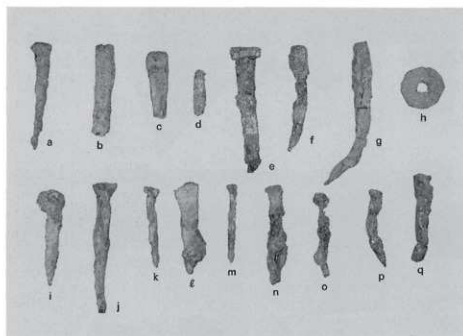
図版14 出土遺物(6・7区)

[a・b-6a区、c-6c区L1、d-6c区L2、e-6c区L3、f-6d区L2、g-6d区L6
上、h~j-7a区、k~n-7a-b区、o-7b区、P・q-7b区表採、r・s-7b区根石前、
t-7b区]



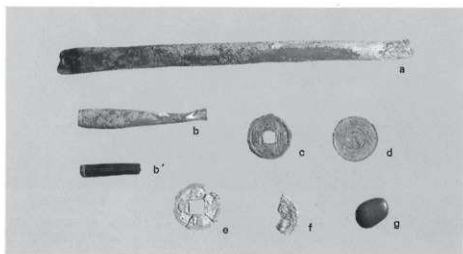
[a-7 a区石垣前面(砥石)、b-1
区衣採(砥石)、e-7 b区(砥石)、
d-7 b区(硯)]

図版15 出土遺物 石製品



[a・b-1区SD01、e-4区SK01、
d-6 c区I.3、e-6 d区L.2、
f-i-9区1 G、j-9区4 G L
2上、k-9区4 G、l-n-9区
7 G L.2上、o・p-9区7 G L.1、
q-9区東披張]

図版16 出土遺物 鉄製品



[a-2区L.1(不明銅製品)、b-9
区L.2(吸口)、b'-b内部に残存
した木片、c-9区7 G(寛永通宝)、
d-9区7 G(一銭)、e-4区L.2
(元祐通宝)、f-7 a-b区(古銭)
g-7 a-b区(基石)]

図版17 出土遺物 銅製品・古銭・基石

報 告 書 抄 録

ふりがな	にほんまつじょうし5							
書名	二本松城址V							
副書名	平成13年度発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	二本松市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第21集							
編著者名	中村真由美							
編集機関	福島県二本松市教育委員会							
所在地	〒964-8601 福島県二本松市金色403番地の1							
発行年月日	西暦2002年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にほんまつ じょうし 二本松城址	ふくしまけん にほんまつし かくな 福島県二本松市郭内4丁目	07210	00019	37° 35' 47"	140° 25' 51"	第6次 20010904 ～1109	970㎡	保存管理計 画に基づく 資料収集
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
二本松城址	城館	中世～近世	石垣 門柱跡 溝跡 土境	54m 2 2 2	陶磁器(肥前、相馬、唐津) 釧・吸口 古銭(元祐通宝) 磁石、石臼、灯明皿、瓦		平場利用状況を把握。 寛永期の石垣を発見。 高台あるいは初期藩生氏の 門柱跡発見。冠木門。 加藤氏時代に勝手門付近の 石垣による繋ぎがなされた ことが判明。	

二本松市文化財調査報告書 第21集

二本松城址V

平成13年度発掘調査報告書

平成14年3月29日発行

編集・発行 福島県二本松市教育委員会

福島県二本松市金色403番地の1

TEL0243-23-1111

印刷 株式会社 日進堂印刷所

福島県福島市庄野字枡場1番地の1

TEL024-594-2211

©2002